

茨城県筑西市

# 炭 焼 戸 東 遺 跡

— つくば明野北部工業団地進入路埋蔵文化財発掘調査報告書 2 —

2008

茨 城 県 筑 西 市  
筑 西 市 教 育 委 員 会  
株 式 会 社 東 京 航 業 研 究 所

茨城県筑西市

# 炭 焼 戸 東 遺 跡

— つくば明野北部工業団地進入路埋蔵文化財発掘調査報告書 2 —

2008

茨 城 県 筑 西 市  
筑 西 市 教 育 委 員 会  
株 式 会 社 東 京 航 業 研 究 所

## 例 言

1. 本書は、茨城県筑西市に所在する炭焼丁東遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、つくば明野北部工業団地進入路建設に伴い、筑西市より調査委託を受けた株式会社東京航業研究所が実施した。
3. 調査については、筑西市教育委員会の指導のもとに行った。

所在地 筑西市松原字炭焼丁 614番地1ほか

調査面積 900㎡

調査期間 平成19年12月3日～平成19年12月26日

調査担当 林 邦雄（東京航業研究所）、小野麻人（東京航業研究所）

調査及び整理参加者 荒川康佑 飯野正子 大関きよ子 加倉井タキ子 川下山光 川村寛央  
杉山ミヨ 土屋隆行 中島伊一 中島 亨 中島 宏 馬場恵美 古川貴弘  
峯岸未以留 村山彩子 森田美代 渡辺弘美

4. 本書の編集は林・小野が担当し、執筆は林・小野・市瀬俊一（東京航業研究所）が分担した。各項の文責は各文末に記載している。
5. 調査に関わる遺物・図面・写真等は、筑西市教育委員会が一括して保管している。
6. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。記して深く謝意を表する次第である（敬称略・順不同）。

今井千恵 佐々木藤雄 村山 修

筑西市建設部土木課

## 凡 例

1. 本文中に掲載した実測図の縮尺は、原則として次の通りである。  
全体図 1/400 溝平面図 1/80 溝断面図 1/40 住居跡 1/40 掘立柱建物跡 1/60 土坑・ピット 1/20  
土器実測図 1/3、1/4 土器拓影図 1/3 土製品 1/2 石製品 1/3、1/4 金属製品 1/3
2. 遺構実測図中の座標値は国家標準直角座標区系に基づく。方位は座標北を、レベルは海拔高を示す。
3. 写真図版は原則として1/3とした。
4. 遺物番号は本文、実測図、写真図版と一致する。
5. 遺構・遺物の色調表記は「新版標準土色帳（2001年度版）」を基準とした。
6. 遺物観察表における法量の（ ）内数値は現存最大値、〔 〕内数値は復原実測値を示す。
7. 遺構内における遺物出土状態を示すにあたり、次の記号を使用した。

●土器

# 目 次

## 序文 例言 凡例 目次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査方法	1
第4節 基本土層	3
第2章 遺跡の概観と立地	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 縄文時代	8
第1節 遺構	8
第2節 遺物	10
第4章 平安時代	11
第1節 遺構	11
第2節 遺物	16
第5章 中世	20
第1節 遺物	20
第6章 近世	21
第1節 遺構	21
第2節 遺物	26
第7章 総括	27
参考文献 報告書抄録 写真図版	

## 挿図・表目次

第1図 遺跡の位置	2	第17図 9号土坑	15
第2図 基本土層図	3	第18図 11号土坑	15
第3図 遺跡全体図	4	第19図 出土遺物(1)	17
第4図 炭焼戸東遺跡と周辺の遺跡	6	第20図 出土遺物(2)	18
第5図 1号土坑	9	第21図 出土遺物	20
第6図 2号土坑	9	第22図 1号溝	21
第7図 3号・4号土坑	9	第23図 2号溝	21
第8図 5号土坑	10	第24図 3・4号溝	22
第9図 10号土坑	10	第25図 5号溝	22
第10図 出土遺物	10	第26図 6号溝	23
第11図 1号住居跡	11	第27図 7号溝	24
第12図 2号住居跡	12	第28図 8号溝	25
第13図 1号掘立柱建物跡	13	第29図 9・10号溝	25
第14図 6号土坑	14	第30図 出土遺物	26
第15図 7号土坑	14	第1表 周辺の遺跡一覧	6
第16図 8号土坑	15	第2表 遺物観察表	19

## 写真図版目次

図版1 遺跡遠景、遺跡全景
図版2 遺跡全景、基本土層、1号住居跡
図版3 1号住居跡、2号住居跡、1号掘立柱建物跡、2・3・4・5号溝
図版4 6号溝、7号溝、9・10号溝、4号土坑、8号土坑、11号土坑、芋穴群、作業風景
図版5 出土遺物(1)、出土遺物(2)
図版6 出土遺物(3)
図版7 出土遺物(4)、出土遺物(5)、出土遺物(6)

# 第1章 調査の概要

## 第1節 調査に至る経緯

平成19年9月4日付け筑土木86号にて、筑西市長 富山省三（建設部土木課）から、筑西市松原地内におけるつくば明野北部工業団地進入路整備工事に伴い「埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて（照会）」が提出された。筑西市教育委員会は、工事予定地が、平成17年度に実施した発掘調査区（注1）に隣接していることを確認し、遺構・遺物の所在が予想されることから、今後の遺跡の取扱いについて筑西市建設部土木課と協議を行った。

協議の結果、工事の計画変更は困難であるため、文化財保護法第94条に基づき、平成19年9月7日付け筑土木第89号にて、筑西市長 富山省三から茨城県教育委員会教育長あて「埋蔵文化財発掘の通知について」が提出された。その後、平成19年9月25日付け文第1003号にて、茨城県教育委員会教育長から筑西市長あて「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」により工事着手前に発掘調査を実施するよう勧告があり、記録保存を目的として発掘調査を実施することとなった。

筑西市教育委員会と筑西市建設部土木課は、発掘調査の実施に向けて具体的内容の調整を図り、調査を株式会社東京航業研究所に委託することとした。調査に際して、筑西市、筑西市教育委員会、株式会社東京航業研究所の三者により「埋蔵文化財に関する協定書」を締結するとともに、株式会社東京航業研究所より平成19年10月25日付けで、茨城県教育委員会教育長あて「埋蔵文化財の発掘調査の届出について」が提出された。調査経費について筑西市が全額負担し、筑西市教育委員会の指導のもと、株式会社東京航業研究所が同年12月3日から12月26日まで発掘調査を実施することとなった。

注1）折原洋一・松田政幸 2006 『筑西市埋蔵文化財調査報告書 第2集 焼炭戸東遺跡』 筑西市教育委員会・山武考古学研究所

## 第2節 調査の経過

発掘調査は平成19年12月3日～平成19年12月26日までの4週間にわたって実施した。先ず12月3日より表土掘削を開始し、地表より20～40cm程の深さで遺構を検出した。5日までに表土掘削を終了し、住居跡2軒、掘立柱建物1棟、溝10条、土坑11基、ピット多数を確認した。これらの遺構の調査を適宜実施し、12月21日にはラジコンによる空中写真撮影及び写真測量を実施、26日に調査を終了した。出土遺物は少なく、収納箱1箱程であった。

整理作業は、平成20年1月7日～平成20年3月13日まで実施した。1・2月には遺物の洗浄・注記・接合作業・写真整理作業と並んで、写真測量した遺構の図化作業をSTP（デジタル図化解析機）を用いて行った。

3月には遺構図面の修正・トレース、遺物の実測・トレース、遺物写真の撮影、図版作成、原稿執筆などの作業を行い、3月には報告書編集作業を実施した。（林）

## 第3節 調査の方法

調査区の座標は公共座標（世界測地系）を基準に設定した。調査対象地は総面積は900㎡を測る。対象地全域が網羅されるよう10m方眼のグリッドを設定した。調査にあたり、包含層および遺構内出土遺物については、原則として光波測量機を用いて3次元記録を実施した。また、遺構については、デジタルカメラ



第1図 遺跡の位置 (1:10,000)

による写真測量と手実測作業を併用した。写真撮影にあたっては35mmモノクロフィルム、35mmカラーリバーサルフィルムを併用し、適宜、記録撮影を行った。(林)

#### 第4節 基本土層

基本土層の確認にあたっては、調査区中央部の西壁に沿って2m×2mのテストピットを設け、土層観察作業を行った。基本土層の概要は以下の通りである。各遺構はⅡ層上面で確認されたが、いずれも覆土は浅く、後世に削平されたものと考えられる。旧石器時代の遺物は確認されなかった。(林)

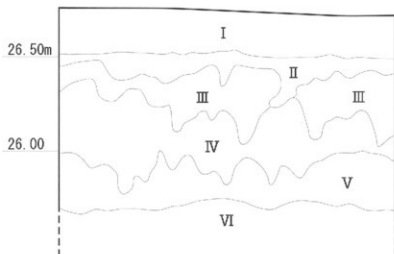
I層 表土・耕作土層

Ⅱ層 10 Y R 3 / 3 暗褐色土層 ローム粒・砂粒を少量含む。粘性をもち、しまる。

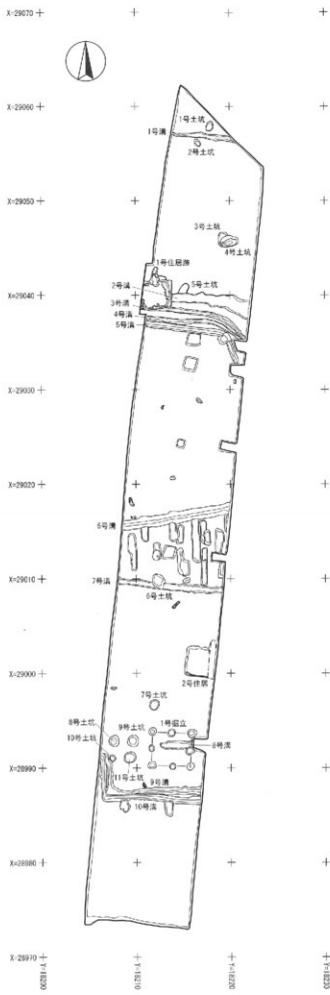
Ⅲ層 10 Y R 4 / 3 黄褐色土層 ハードローム層。砂粒・赤色粒子を少量含む。粘性をもち、しまる。

Ⅳ層 10 Y R 4 / 6 褐色土層 砂粒・赤色粒子を少量含む。粘性をもち、しまる。

V層 10 Y R 5 / 4 黄褐色土層 砂粒・灰白色粒子を多量含む。粘性をもち、しまる。



第2図 基本土層 (1:20)



第3图 遺跡全体图 (1:400)



## 第2章 遺跡の概観と立地

### 第1節 地理的環境

炭焼戸東遺跡は、茨城県の西部、筑西市の松原地区に所在する。筑西市は南東に筑波山を望み、北と西で県境と接し、北が栃木県芳賀郡二宮町、東には桜川市、南には下妻市、西には結城市及び栃木県下野市がそれぞれ隣接する。本遺跡は筑西市に所在しているが、筑西市は2005年3月に下館市、関城町、明野町、協和町とが合併して誕生した市で、合併前の地名は真壁郡明野町大字松原炭焼戸である。

旧明野町は、東に筑波山麓に沿って霞ヶ浦に流れ込む桜川とその支流の観音川、西に利根川に流れ込む小貝川に挟まれた標高20～40mの低台地に立地し、支谷によって複雑に開折を受けている。西方は小貝川による堆積と考えられる台地が形成され、東方は桜川付近まで平坦な地形である。本遺跡を含む旧明野町の大部分はその平坦な地に所在する。現在、微高地は集落や畑地、その他は水田として利用されている。また、遺跡は東側の台地周縁から桜川に至る低位台地を中心に確認されている。

### 第2節 歴史的環境

本遺跡は旧明野町市街地より北に約1km、桜川支流の大川左岸に位置する。周囲は畑地や水田が広がる標高27mを測る地点である。本地点周辺では旧石器時代より生活の痕跡が見出され、特に古墳時代後期より遺跡数が爆発的に増加する。また、中世から海老ヶ島城が築城され、中世以降は海老ヶ島城を中心に発展を遂げる。現在の西及び東松原地区や海老ヶ島地区は海老ヶ島城の城下町として発展したと考えられる。以下で各時代の主だった遺跡を概観する。なお、各遺跡番号は茨城県遺跡地図（茨城県教育委員会 平成13年）に拠っている。

旧石器時代の遺跡としては中根十三塚遺跡、中妻（倉持）遺跡があげられる。茨城県教育財団の調査によって中根十三塚遺跡からはナイフ形石器や剥片、中妻（倉持）遺跡からはナイフ形石器や尖頭器などが確認されている。

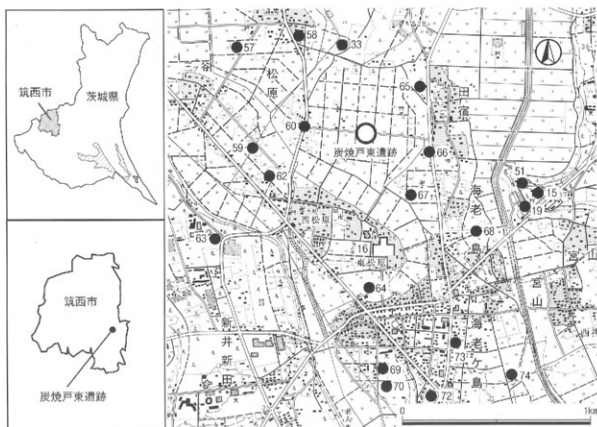
縄文時代の遺跡は比較的広範囲に及び、中妻（倉持）遺跡、山王堂遺跡、宮山遺跡（15）、鍋山東原遺跡（33）、台山遺跡（63）、岡山遺跡（69）、館野遺跡（74）などが確認されている。館野遺跡では、中期後葉の加曾利EⅢ式土器や石鏃、凹石などが出土している。中妻（倉持）遺跡では、中期から後期にわたる住居跡や土坑、埋甕等が検出されている。中でも骨片を伴う土壇や埋甕が確認されていることは特筆される。縄文時代中期から後期を中心にある程度の規模を持つ集落が形成されていたことが推測される。

弥生時代の遺跡は、宮山遺跡（15）、岡山遺跡（69）、館野遺跡（74）などがあげられる。館野遺跡では、住居跡5軒と二軒層式の弥生土器、紡錘車3点が出土している。この時期の旧明野町域では後期が主流で、小規模な集落が営まれていたと考えられる。

古墳時代では、当遺跡を含め、多くの遺跡が知られている。主な集落遺跡としては、宮山遺跡（15）、鍋山東原遺跡（33）、石倉東遺跡（58）、中根遺跡（59）、炭焼戸東遺跡（61）、新堀遺跡（62）、台山遺跡（63）、城ノ内遺跡（64）、菰冠北遺跡（66）、菰冠南遺跡（67）、戸張遺跡（68）、岡山遺跡（69）、海老ヶ島東原遺跡（73）、館野遺跡（74）などと数多いが、調査された遺跡は少ない。館野遺跡では後期の住居跡が2軒検出されている。古墳では、全長約100mを測る前方後円墳の高山観音古墳（19）、稲荷塚古墳（70）が確認され、鍋山東原遺跡（33）では墳頂8基が確認されている。古墳は中期頃に造営されることより、この時期にはこの地

第1表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	時代					番号	遺跡名	時代				
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安			中世以前	旧石器	縄文	弥生	古墳
15	宮山遺跡		○	○	○	○	63	台山遺跡		○		○	○
16	海老ヶ島城跡					○	64	城ノ内遺跡				○	○
19	宮山観音古墳				○		65	田宿炭焼戸遺跡					○
33	鍋山東原遺跡		○		○	○	66	菰冠北遺跡				○	○
34	八坂神社古墳				○		67	菰冠南遺跡				○	○
51	宮山石倉遺跡						68	戸張遺跡				○	○
57	石倉西遺跡				○	○	69	岡山遺跡		○	○	○	○
58	石倉東遺跡				○	○	70	稲荷塚古墳				○	
59	中根遺跡				○	○	72	久保新田遺跡					○
60	炭焼戸西遺跡					○	73	海老ヶ島東原遺跡				○	○
62	新堀遺跡				○		74	館野遺跡		○	○	○	○



第4図 炭焼戸東遺跡と周辺の遺跡 (国土地理院発行 1:25,000『真壁』【筑波】に加筆)

城を支配する官長層が存在していたことがわかる。

奈良・平安時代も古墳時代から継続して集落が営まれていることを遺跡の分布から知ることができる。主な遺跡をあげると、宮山遺跡 (15)、鍋山東原遺跡 (33)、石倉西遺跡 (57)、石倉東遺跡 (58)、中根遺跡 (59)、炭焼戸東遺跡 (61)、台山遺跡 (63)、城ノ内遺跡 (64)、菰冠北遺跡 (66)、菰冠南遺跡 (67)、戸張遺跡 (68)、岡山遺跡 (69)、海老ヶ島東原遺跡 (73)、館野遺跡 (74) が確認されている。中でも、館野遺跡で9世紀代に使用されていたと思われる第2号井戸から木製品の糸巻きと崩串が出土している。当時期の祭祀行為の一端が垣間見える遺物である。また本遺跡で2006年度に行われた調査によって、9世紀中葉から10世紀代の須恵器に「院」の墨書土器が多数出土していることも見逃せない。この時期は、延暦年間に白壁郡から真壁郡に改称されたことなどから、律令制下における中央集権化が進んだ時期であるが、平高望の東国への下向に伴う、平氏族の土着化と勢力の拡大が行われた時期でもあり、真壁郡近辺でも数回の合戦が行われたと『将門記』に記されている。なお、旧明野町周辺では将門伝承が数多く残されており、旧明野地区東石田には将門の伯父にあたる平国香の居館が存在したと伝えられている。

中世以降の遺跡としては、宮山遺跡 (15)、海老ヶ島城跡 (16)、鍋山東原遺跡 (33)、炭焼戸西遺跡 (60)、炭焼戸東遺跡 (61)、田宿炭焼戸遺跡 (65)、菰冠北遺跡 (66)、菰冠南遺跡 (67)、戸張遺跡 (68)、岡山遺跡 (69)、久保新田遺跡 (72)、海老ヶ島東原遺跡 (73) 館野遺跡 (74) などが確認されているが、基本的には海老ヶ島城に係わる遺跡が多い。

(市瀬・林)

## 第3章 縄文時代

### 第1節 遺構

縄文時代に属する遺構としては、1～5・10号の6基の土坑をあげることができる。いずれも形状や覆土のあり方などから、その可能性が推測されるものであり、縄文土器を共存するものはみられない。南側の10号土坑を除くと、調査区の北側に集中分布する傾向を示している。4号土坑は特徴的な形状から当該期の落とし穴であったと考えられる。

#### 1号土坑

調査区の北端に位置する。南側に近接して1号溝が分布する。平面形は長楕円形を呈し、長径110cm、短径74cm、深さ28cmを測る。主軸方向はN-11°-Eである。断面は鍋底状に近く、坑底はやや丸味をもつ。遺物の出土はみられなかったが、覆土のあり方などから判断して縄文時代の所産であった可能性が高い。

#### 2号土坑

調査区の北端に位置する。北側に近接して1号溝が分布する。平面形は楕円形を呈し、長径89cm、短径57cm、深さ12cmを測る。主軸方向はN-20°-Wである。断面は鍋底状に近く、坑底は丸味をもつ。遺物の出土はみられなかったが、覆土のあり方などから判断して縄文時代の所産であった可能性が高い。

#### 3号土坑

調査区の北側東寄りに位置する。南東側を4号土坑に切られる。平面形は長楕円形を呈し、長径156cm、短径100cm以上、深さ24cmを測る。主軸方向はN-3°-Eである。断面は筒状ないし鍋底状を呈し、壁は比較的急傾斜で掘り込まれている。坑底は起伏をもち、浅いピットを伴う。遺物の出土はみられなかったが、覆土のあり方などから判断して縄文時代の所産であった可能性が高い。切り合い関係をみると4号土坑に先行する。

#### 4号土坑

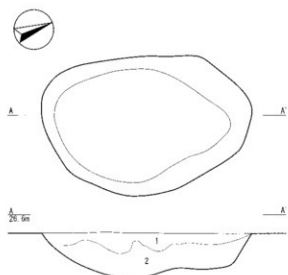
調査区の北側東寄りに位置する。西側で3号土坑を切る。平面形は不整長楕円形を呈し、長径192cm、短径120cm、深さ63cmを測る。主軸方向はN-79°-Eである。断面は漏斗状を呈し、上部を除いて比較的急傾斜で掘り込まれた壁が丸味のある坑底へと続く。遺物の出土はみられなかったが、形状および覆土のあり方などから判断して縄文時代の所産であった可能性が高い。切り合い関係をみると3号土坑に後続する。

#### 5号土坑

調査区の北側に位置する。南側を2号溝に切られる。平面形は不整長楕円形を呈し、長径129cm以上、短径85cm、深さ21cmを測る。主軸方向はN-32°-Eである。断面は皿状に近く、坑底はやや起伏をもつ。遺物の出土はみられなかったが、覆土のあり方などから判断して縄文時代の所産であった可能性が高い。

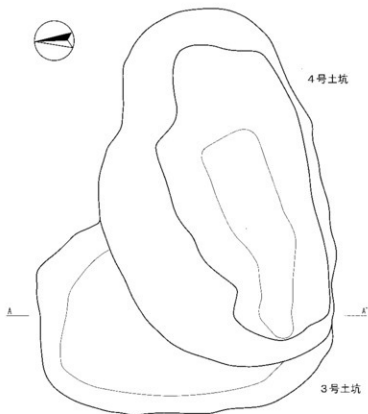
#### 10号土坑

調査区の南側西寄りに位置する。平面形は楕円形を呈し、長径71cm、短径59cm、深さ17cmを測る。主



- 1号土坑土層説明  
 1 TOPC34暗褐色土 褐色土ブロック少量混入。粘性をもち、しるる。  
 2 TOP346暗赤土 rome土少量混入。粘性をもち、しるる。

第5図 1号土坑 (1:20)



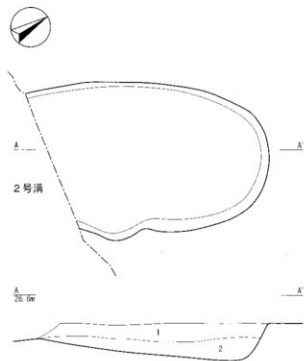
- 2号土坑土層説明  
 1 TOPC34暗褐色土 rome土少量混入。粘性をもち、しるる。  
 2 TOPC34暗褐色土 rome土少量混入。粘性をもち、しるる。  
 3 TOP346暗赤土 rome土少量混入。粘性をもち、しるる。

第6図 2号土坑 (1:20)

- 3号土坑土層説明  
 1 TOPC34暗褐色土 rome土少量混入。粘性をもち、しるる。  
 2 TOP346暗赤土 rome土少量混入。粘性をもち、しるる。

- 4号土坑土層説明  
 1 TOPC34暗褐色土 rome土少量混入。粘性をもち、しるる。  
 2 TOP346暗赤土 rome土少量混入。粘性をもち、しるる。  
 3 TOP346暗赤土 rome土少量混入。粘性をもち、しるる。  
 4 TOP346暗赤土 rome土少量混入。粘性をもち、しるる。  
 5 TOP346暗赤土 rome土少量混入。粘性をもち、しるる。

第7図 3号・4号土坑 (1:20)



6期上段土層内期  
 1 100%の赤褐色土 ローム粒細量減少、焼灰をもち、しまる。  
 2 100%の褐色土 ローム粒細量、ロームブロック等減少、粘性をもち、しまる。

第8図 5号土坑 (1:20)

軸方向はN-30°-Wである。断面は鍋底状に近く、坑底はやや丸味をもつ。遺物の出土はみられなかったが、覆上のあり方などから判断して縄文時代の所産であった可能性が強い。

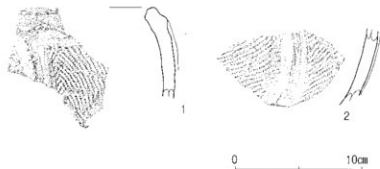
(林)

## 第2節 遺物

当該期の遺物としては縄文土器2片が遺構外より出土している。いずれも中期末葉・加曾利EIV式土器である。

1は小波状を呈する口縁部破片、2は同一個体と思われる胴部破片である。口縁部下の幅狭の無文帯をはさんで断面三角形の隆起線による曲線的な区画文が描かれており、区画内にはRL縄文が充填される。暗褐色を呈し、胎土には石英・黒色粒子・砂粒などを含む。焼成は普通である。

(林)

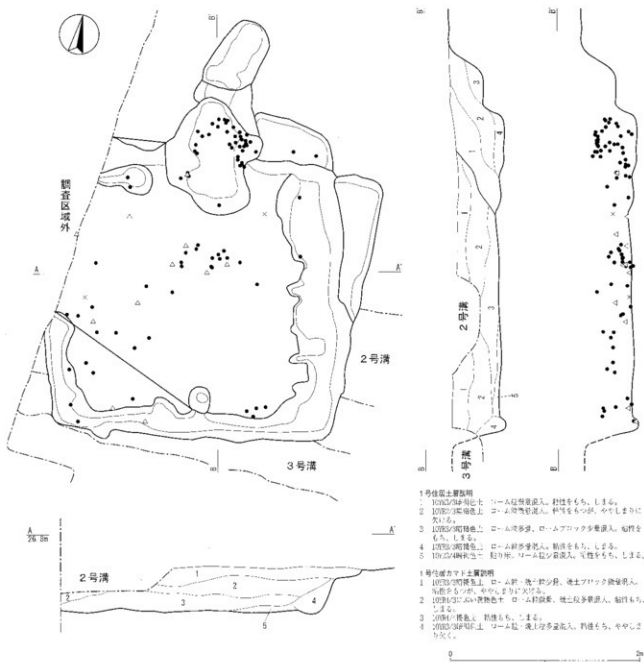


第10図 出土遺物 (1:3)

## 第4章 平安時代

### 第1節 遺構

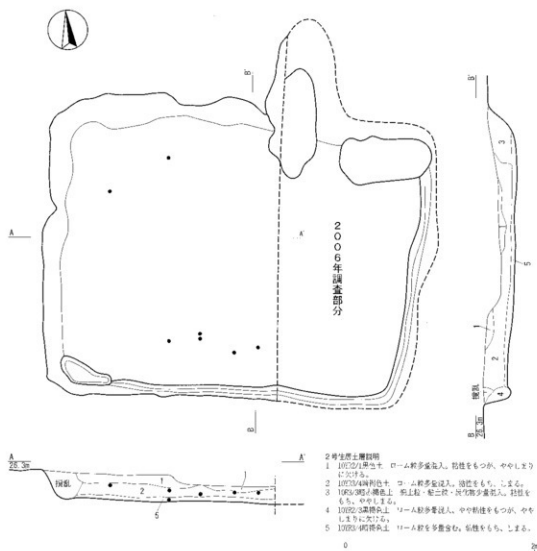
平安時代の遺構としては、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟、1坑5基の分布が確認されている。北側の1号住居を除くと、調査区の南側に集中分布する傾向を示している。2号住居は2006年に山武考古学研究所によって調査された14号住居の西側部分にあたる。



第11図 1号住居跡 (1:40)

#### 1号住居跡

調査区の北側西寄りに位置する。北西側は調査区域外にかかる。上面を2・3号溝に切られるが、遺存状態は比較的良好である。平面形は方形を呈し、長径約325cm、短径約310cmを測る。主軸方向はN-11°-Wを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は48cmを測る。床面は出褐色土を用いて貼り床面が形成されていた。全体に起伏をもつ。壁面によって周溝が検出された。各所に掘痕を受けているが、平



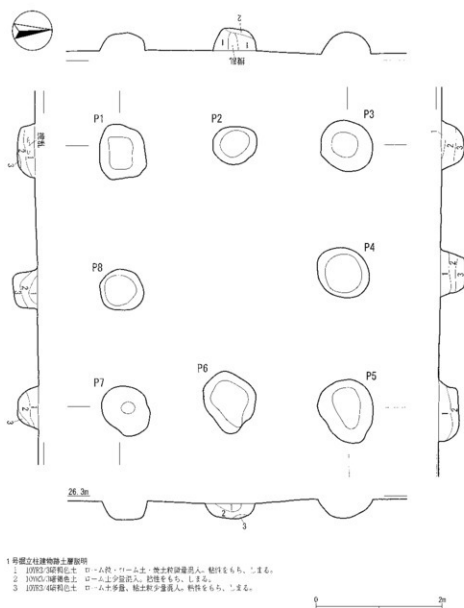
第12図 2号住居跡 (1:40)

均幅20cm、深さ5cmを測り、北側を除いてほぼ全周する。中央部と周溝部に挟まれるように掘り方が検出されたが、全体的に浅く、最も深い部分でも5cmほどにとどまる。住居内から検出されたピットは南壁際の1個に限られる。口径28cm、深さ10cmを測る。カマドは短軸線に沿った北壁ほぼ中央部に位置する。袖部は耕作などによって削平されており、燃焼部と煙道部が確認されただけである。煙道部は長く伸び、袖部には土師器甕(第19図16)の破片が貼り付けられていた。また、燃焼部から支脚に使用されたと考えられる土師器甕(第19図17)が底部を上にした状態で検出された。北壁外に張り出すように、カマドの東側より棚状施設が検出された。長さ78cm、奥行き45cm、床面より高さ30cmほどを測る。同様の施設は東壁北側にも認められるが、やや不明瞭である。確認面より床面にかけて須恵器53片、土師器216片、土製品1点、石器4点、鉄製品9点が出土している。内訳は須恵器坏・甕、土師器坏・高台付坏・高台付皿・鉢・甕、紡錘車、砥石、磨石、鎌などである。このうち、23点を図示した(第19・20図1~18・22~26、第2表、図版5~7)。出土遺物や覆土のあり方などから判断して9世紀中葉の所産と考えるのが妥当であるように思われる。切り合い関係を見ると2・3号溝に先行する。

## 2号住居跡

調査区の中央部南東側に位置する。東側は2006年に山武考古学研究所によって調査された14号住居の東





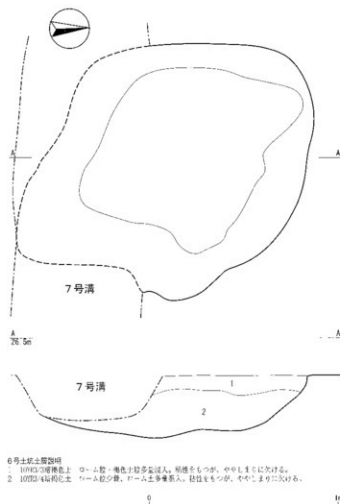
第13図 1号独立柱建物跡 (1:60)

側部分にあたる。平面形は長方形を呈し、長径約420cm、短径約324cmを測る。主軸方向は $N-10^{\circ}-E$ を示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は30cmを測る。床面は黒褐色土を用いて貼り床面が形成されていた。全体に起伏をもつ。周溝は南側部分で確認されただけである。平均幅7cm、深さ5cmを測る。掘り方はほぼ床面全面に及ぶ。全体的に浅く、最も深い部分でも9cmほどにとどまる。住居内からはピットは検出されなかった。カマドは短軸線に沿った北壁中央部の東寄り、2006年調査部分に位置しており、カマドの東側にあたる北東隅からは貯蔵穴が確認されている。確認面から床面にかけて須恵器2片、土師器43片が出土している。内訳は須恵器瓶、土師器杯・高台付皿などである。このうち、3点を図示した(第20図19~21、第2表、図版6)。出土遺物や覆土のあり方などから判断して9世紀中葉の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

#### 1号掘立柱建物跡

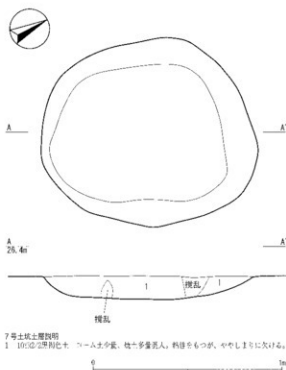
調査区の南側に位置する。北東側で8号溝と重複する。平面形は2間×2間の建物跡と思われる。桁行430cm、梁行360cm、柱穴間隔は棟側で200~220cm、妻側で170~200cmを測る。長軸方向は $N-89^{\circ}-W$ である。

柱穴の平面形は楕円形を呈するものが多く、口径 69～100 cm、深さ 24～40 cm を測る。遺物の出土はみられなかったが、形状や覆土のあり方などから判断して平安時代の所産であった可能性が高い。



第14図 6号土坑 (1:20)

6号土坑土層説明  
1 10%赤褐色土 コーム粒・褐色土粒多量混入。形跡をもつが、ややしまりに欠ける。  
2 10%赤褐色土 コーム粒少量、ワーム土多量混入。粒跡をもつが、ややしまりに欠ける。



第15図 7号土坑 (1:20)

7号土坑土層説明  
1 10%赤褐色土 コーム土少量、粒多量混入。形跡をもつが、ややしまりに欠ける。

#### 6号土坑

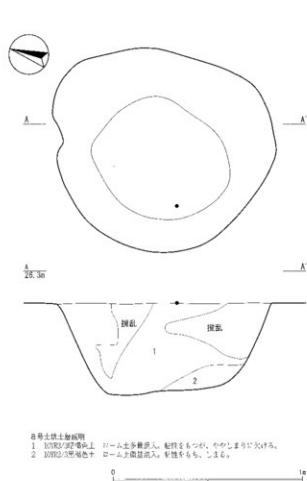
調査区の中央部に位置する。南側を7号溝に切られる。平面形は不整楕円形を呈し、長径 175 cm、短径 132 cm、深さ 38 cm を測る。主軸方向は  $N-30^{\circ}-W$  である。断面は鍋底状に近く、坑底は丸味をもつ。遺物の出土はみられなかったが、覆土のあり方などから判断して平安時代の所産であった可能性が高い。切り合い関係を見ると7号溝に先行する。

#### 7号土坑

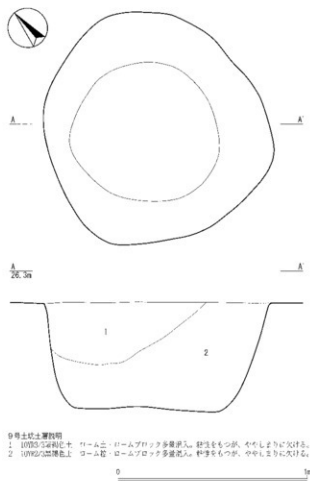
調査区の南側に位置する。南西側に近接して8・9・11号土坑が分布する。平面形は楕円形を呈し、長径 113 cm、短径 106 cm、深さ 19 cm を測る。主軸方向は  $N-19^{\circ}-E$  である。断面は皿状に近く、坑底は起伏をもつ。遺物の出土はみられなかったが、覆土のあり方などから判断して平安時代の所産であった可能性が高い。

#### 8号土坑

調査区の南側西寄りに位置する。東側に9号土坑、南東側に11号土坑がそれぞれ近接して分布する。平面形は楕円形を呈し、長径 156 cm、短径 130 cm、深さ 50 cm を測る。主軸方向は  $N-28^{\circ}-W$  である。断面は筒状を呈し、壁は急傾斜で掘り込まれている。坑底は起伏をもつ。遺物の出土はみられなかったが、覆土のあり方などから判断して平安時代の所産であった可能性が高い。



第16図 8号土坑 (1:20)



第17図 9号土坑 (1:20)

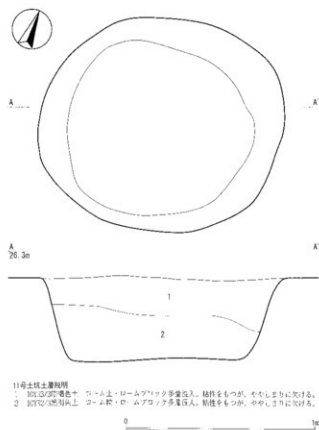
### 9号土坑

調査区の南側西寄りに位置する。平面形は楕円形を呈し、長径123cm、短径116cm、深さ58cmを測る。主軸方向はN-15°-Eである。断面は筒状を呈し、壁は急傾斜で掘り込まれている。坑底は起伏をもつ。遺物の出土はみられなかったが、覆土のあり方などから判断して平安時代の所産であった可能性が強い。

### 11号土坑

調査区の南側西寄りに位置する。平面形は楕円形を呈し、長径133cm、短径117cm、深さ46cmを測る。主軸方向はN-88°-Wである。断面は筒状を呈し、壁は急傾斜で掘り込まれている。坑底は起伏をもつ。遺物の出土はみられなかったが、覆土のあり方などから判断して平安時代の所産であった可能性が強い。

(林)



第18図 11号土坑 (1:20)

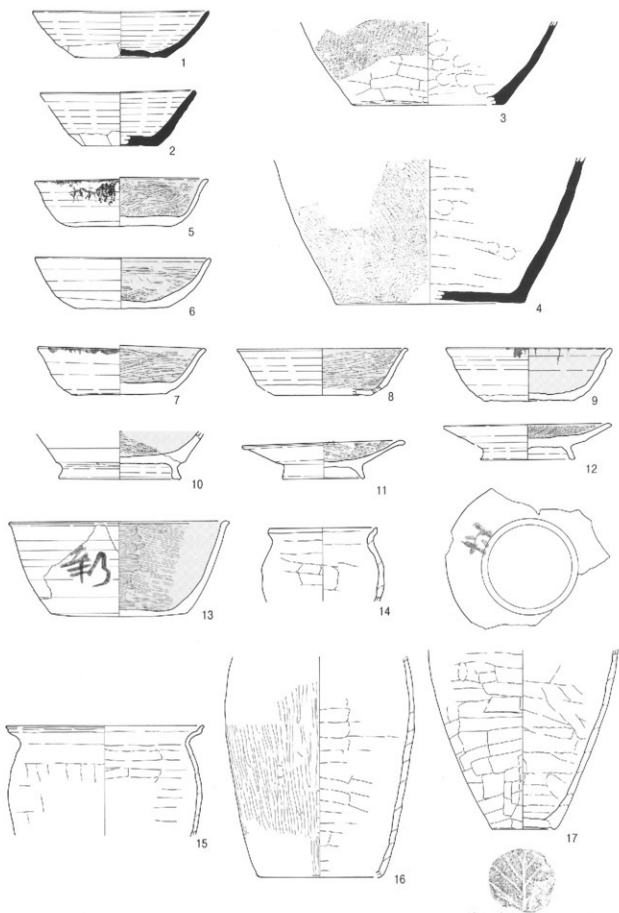
## 第2節 遺物

平安時代の遺物としては、須恵器（杯・甕・甔）57片、土師器（杯・高台付杯・高台付皿・鉢・壺）280片、土製品（紡錘車）1点、石器（砥石・磨石）4点、鉄製品（鎌ほか）9点が出土している。遺構内から出土したものが大半であり、遺構外から出土したものは須恵器2片、土師器21片と限られる。遺構内出土遺物はいずれも1号と2号の2軒の住居に伴うものであり、特に1号住居から多く出土している。

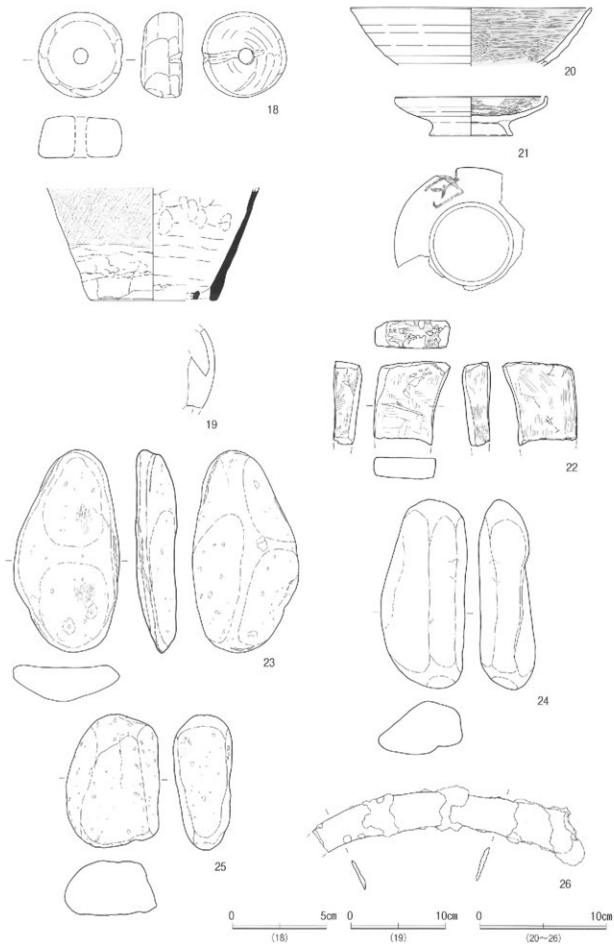
1号住居からは須恵器53片、土師器216片、土製品1点、石器4点、鉄製品9点が出土している。このうち、形状の明らかな須恵器4点、土師器13点、土製品1点、石器4点、鉄製品1点、合計23点を図示した。1・2は須恵器杯、3・4は須恵器甕である。1・2は轆轤による成形で時計周りの回転である。底部は一方のみへのヘラケズリである。3は焼成が悪く、土師器に近い。4は外面にタタキ目が施されるが、胴部中位は平行目の工具、下位は半円形目の工具が使用されている。5～9は土師器杯である。6は内面に黒色処理は施されていないが、丁寧なミガキを施している。9は内面に黒色処理が施されているが、ミガキは施されていない。5・7・8は内面に黒色処理、丁寧なミガキが施されている。7以外の杯は轆轤による成形で時計周りの回転である。5は底部の径がやや長く、やや古式の様相が見られる。10は土師器の高台付杯である。内面は黒色処理、丁寧なミガキが施されている。轆轤による成形で、時計周りの回転である。高台はヘラケズリによる調整後、高台を貼り付けている。11・12は土師器の高台付皿である。11には黒色処理が見られず、ミガキによる調整のみである。内面に墨書があるが判読不明である。12は内面に黒色処理、丁寧なミガキが施される。轆轤による成形で時計周りの回転である。外面体部に横書きで「平」という文字が墨で書かれている。13は土師器の鉢である。内面に黒色処理、丁寧なミガキが施される。外面に縦書きで「新」と思われる文字が墨で書かれている。14は土師器の小型甕、15～17は土師器の甕である。16は外面に丁寧なミガキが施されている。17は底部に木葉痕がある。18は土製の紡錘車である。外面は丁寧に磨かれている。22の砥石は全面が使用されている。26は鉄製の鎌で、先端部が欠損している。右手用の鎌である。図示した土師器と須恵器は9世紀中頃のもので、4のみやや古いものと思われる。

2号住居からは須恵器2片、土師器43片が出土している。このうち、形状の明らかな須恵器1点、土師器2点を図示した。19は須恵器の甕である。底部は十字状に残し、中央部に円形の穿孔が施されるタイプのものと思われる。20はやや大型の土師器の杯である。内面は黒色処理、丁寧なミガキが施される。21は土師器の高台付皿である。内面は黒色処理が施され、丁寧なミガキがみられる。外面体部には斜め書きで「内」の文字が墨により書かれる。図示した3点は9世紀中頃のものと思われる。

(林)



第19图 出土遗物(1) (1·2·5~12·14=1:3、3·4·13·15~17=1:4)



第20図 出土遺物(2) (18 = 1 : 2、19 = 1 : 4、20 ~ 26 = 1 : 3)

第2表 遺物観察表

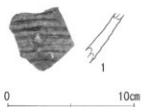
遺物 番号	出土 位置	器種	種別	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	1号住居	坏	須恵器	1/2 残存	(139)	7.1	3.7	外面口縁から体部ヨコナデ、体 部下と底部ヘラケズリ、内面ヨ コナデ	石英、少量 の白色粒	不良	褐色	9世紀中葉
2	1号住居	坏	須恵器	1/2 残存	121	5.9	4.4	外面1縁から体部ヨコナデ、体 部下と底部ヘラケズリ、内面ヨ コナデ	白色粒、少 量の赤色粒	良好	灰青色	9世紀中葉
3	1号住居	甕	須恵器	胴下 半部	—	(16.0)	—	外面胴部上位平行のタタキ目、 胴部上位ヘラケズリ、内面ナデ	石英、雲母	やや 不良	暗赤褐色	9世紀中葉
4	1号住居	甕	須恵器	胴部一 底部	—	(20.0)	—	外面胴部上位平行のタタキ目、 胴部下位平行のタタキ目、内 面ナデ	石英、白色 粒	良好	明灰青色	9世紀前半
5	1号住居	坏	土師器	完全	134	7.8	3.9	外面口縁から体部ヨコナデ、底 部回転ヘラケズリ、口縁部にタ ール付着、内面黒色処理、丁寧 ミガキ	石英、赤色 粒、少量の 雲母	良好	褐色	9世紀中葉
6	1号住居	坏	土師器	ほぼ 完全	136	7.2	4.1	外面口縁～体部ヨコナデ、体部 下端回転ヘラケズリ、内面ミガ キ	石英、赤色 粒、少量の 雲母	良好	明褐色	9世紀中葉
7	1号住居	坏	土師器	完全	131	7.4	3.9	外面口縁から体部ヨコナデ、底 部回転ヘラケズリ、口縁部にタ ール付着、内面黒色処理、ミガキ、 赤色の付着物	雲母、少量 の石英、赤 色粒	良好	明褐色	9世紀中葉
8	1号住居	坏	土師器	1/3 残存	(132)	7.5	3.7	外面口縁から体部ヨコナデ、底 部回転ヘラケズリ、内面黒色処 理、丁寧ミガキ	黒色粒、少 量の石英、 赤色粒	良好	明褐色	9世紀中葉
9	1号住居	坏	土師器	ほぼ完 全	128	7.1	4.2	外面口縁から体部ヨコナデ、底 部回転ヘラケズリ、口縁部にタ ール付着、内面黒色処理	石英、赤色 粒	やや 不良	明褐色	9世紀中葉
10	1号住居	高台付 坏	土師器	胴部一 脚部	—	(9.4)	<39>	外面体部ヨコナデ、底部ヘラケ ズリ、貼り付け高台、内面黒色 処理、丁寧ミガキ	少量の石英、 赤色粒	良好	黒色	9世紀中葉
11	1号住居	高台付 甕	土師器	ほぼ 完全	125	6.3	3.0	外面口縁から体部ヨコナデ、底 部高台貼り付け後ナデ、内面ミ ガキ	少量の石英、 赤色粒	良好	褐色	9世紀中葉
12	1号住居	高台付 甕	土師器	2/3 残存	(130)	7.3	2.8	外面口縁から体部ヨコナデ、底 部ヘラケズリ、貼り付け高台、 内面黒色処理、丁寧ミガキ	石英、赤色 粒、少量の 雲母	良好	明褐色	9世紀中葉 体部「下」の雲母
13	1号住居	鉢	土師器	1/2 残存	234	14.4	10.0	外面口縁から体部ヨコナデ、底 部ヘラケズリ、内面黒色処理、 丁寧ミガキ	石英、白色 粒、少量の 赤色粒	良好	赤褐色	9世紀中葉 体部「下」の雲母
14	1号住居	甕	土師器	口縁一 脚部	(8.4)	—	—	外面口縁ヨコナデ、胴部ヘラケ ズリ、内面ナデ	石英	良好	暗褐色	9世紀中葉
15	1号住居	甕	土師器	口縁一 脚部	(20.6)	—	—	外面口縁ヨコナデ、胴部ヘラケ ズリ、内面ナデ	石英、少量 の赤色粒	良好	暗褐色	9世紀中葉
16	1号住居	甕	土師器	胴下 半部	—	(13.0)	—	外面ミガキ、内面ヘラナデ	石英、少量 の赤色粒	良好	褐色	9世紀中葉
17	1号住居	甕	土師器	胴部一 底部	—	7.0	—	外面胴部ヘラケズリ、底部木置 痕、内面ヘラナデ	石英・白色 粒	良好	褐色	9世紀中葉
18	1号住居	紡錘車	土製品	完全	—	—	—	断面ミガキ	石英・白色 粒、赤色粒	良好	明褐色	9世紀中葉 上部径3.6cm、下部径 4.2cm、高さ2.3cm、孔 径0.7cm、重さ47.3g
19	2号住居	竈	須恵器	胴部一 底部	—	—	13.2	外面胴部平行のタタキ目、胴部 下位ヘラケズリ、やや軟質で土 師器に近い、内面ナデ	石英、雲母	やや 不良	暗灰褐色	9世紀中葉
20	2号住居	坏	土師器	口縁一 体部	(18.8)	—	—	外面口縁から体部ヨコナデ、内 面黒色処理、丁寧ミガキ	石英、白色 粒	良好	暗褐色	9世紀中葉
21	2号住居	高台付 甕	土師器	1/2残 存	(125)	6.5	3.1	外面口縁から体部ヨコナデ、底 部高台貼り付け後ナデ、内面黒 色処理、丁寧ミガキ	石英、雲母、 少量の白色 粒	良好	明褐色	9世紀中葉 体部「内」の雲母
22	1号住居	磁石	石製品	—	—	—	—	平欠、中張、5紙面	—	—	—	砂岩、長さ6.3cm、幅 5.9cm、厚さ2.2cm、重 量101.9g
23	1号住居	磨石	石製品	—	—	—	—	海苔の横切面、全面に雲母、若 くは上には明瞭な縦糸痕、砥石 としても利用	—	—	—	砂岩、長さ15.3cm、幅 8.3cm、厚さ2.8cm、重 量177.9g
24	1号住居	磨石	石製品	—	—	—	—	漆沢湖、全面に雲母、部分的に 縦糸痕	—	—	—	砂岩、長さ14.9cm、幅 6.7cm、厚さ4.2cm、重 量384.4g
25	1号住居	磨石	石製品	—	—	—	—	漆沢湖、全面に雲母、部分的に 縦糸痕	—	—	—	砂岩、長さ10.6cm、幅 7.3cm、厚さ4.3cm、重 量534.6g
26	1号住居	鎌	鉄製品	—	—	—	—	同遺物欠損	—	—	—	長さ21.4cm、幅2.8 cm、厚さ0.3cm、重量 61.3g

## 第5章 中 世

### 第1節 遺物

遺構外より瀬戸・美濃系陶器が1片出土しただけであり、当該期に属する遺構の分布は未確認に終わった。

1は瀬戸・美濃系大鉢の体部破片である。内外面とも灰釉が施されている。胎土は灰色を呈し、密であり、微量の長石を含む。(林)



第21図 出土遺物 (1:3)

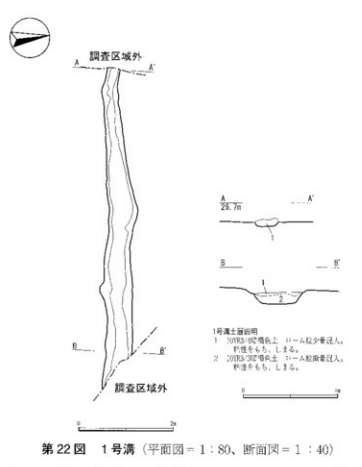


## 第6章 近 世

### 第1節 遺構

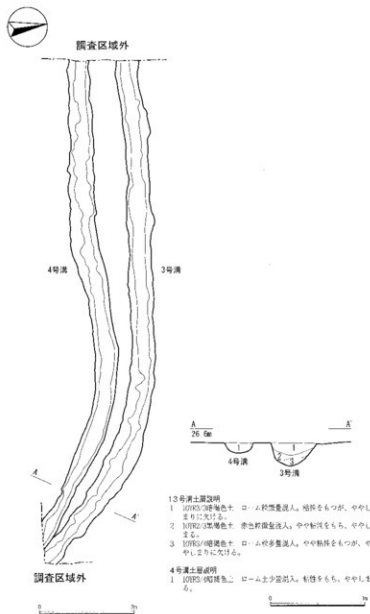
近世の遺構として溝10条が検出されている。東西に走るものがほとんどであり、調査区のほぼ全域にわたって分布している。このうち、3～5号溝は2006年に山武考古学研究所によって調査された13・14号溝、6号溝は同じく12号溝、7号溝は11号溝、9・10号溝は9号溝のそれぞれ西側部分にあたる。

なお、本報告では触れることはできなかったが、今回の発掘では、調査区中央部を中心に近・現代のイモ穴多数が検出されていることを付け加えておきたい。



#### 1号溝

調査区の北端を東西方向にはほぼ直進している。確認部分の全長は6.7m、上幅32～72cm、底幅18～47cm、深さ16mを測る。主軸方向はN-85°-Wである。断面は逆台形状を呈する。底面はやや起伏をもち、西から東に向けてゆるやかに傾斜する。遺物の出土はみられなかったが、覆上のあり方などから判断して近世の所産であった可能性が高い。



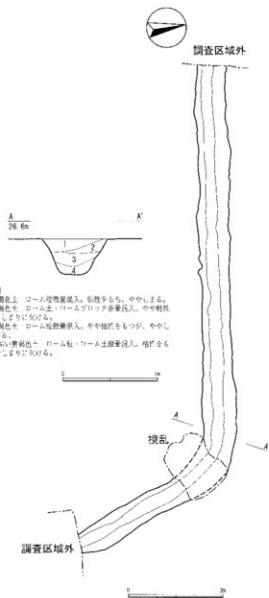
第24図 3号・4号溝 (平面図 = 1 : 80, 断面図 = 1 : 40)

### 2号溝

調査区の北側を東西方向にほぼ直進している。南側を3～5号溝が並走する。西側で1号住居跡と5号土坑を切る。確認部分の全長は10.5m、上幅82～200cm、底幅76～181cm、深さ22cmを測る。主軸方向はN-84°-Wである。断面は緩やかなU字状を呈する。底面はやや起伏をもち、東から西に向けてゆるやかに傾斜する。遺物の出土はみられなかったが、覆土のあり方などから判断して近世の所産であった可能性が強い。

### 3号溝

調査区の北側を東から西へ大きくカーブを描きながら走る。南側を4号溝が並走する。西側で1号住居跡を切る。確認部分の全長は11.1m、上幅40～66cm、底幅22～39cm、深さ28cmを測る。主軸方向はN-83°-Wである。断面は緩やかなU字状を呈する。底面はやや起伏をもち、東から西に向けてゆるやかに傾斜する。遺物の出土はみられなかったが、覆土のあり方などから判断して近世の所産であった可能性が強い。



第25図 5号溝 (平面図 = 1 : 80, 断面図 = 1 : 40)

#### 4号溝

調査区の北側を東から西へ大きくカーブを描きながら走る。南側を5号溝が並走する。西側で1号住居跡を切る。確認部分の全長は10.5 m、上幅32～60 cm、底幅15～41 cm、深さ17 cmを測る。主軸方向はN-86°-Wである。断面は緩やかなU字状を呈する。底面はやや起伏をもち、東から西に向けてゆるやかに傾斜する。遺物の出土はみられなかったが、覆土のあり方などから判断して近世の所産であった可能性が高い。

#### 5号溝

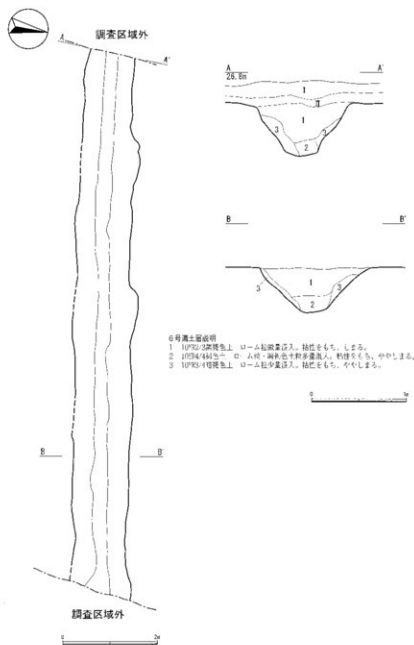
調査区の北側を東から西へ大きくカーブを描きながら走る。確認部分の全長は11.7 m、上幅54～72 cm、底幅14～30 cm、深さ38 cmを測る。主軸方向はN-82°-Wである。断面は逆台形状を呈する。底面はやや起伏をもち、東から西に向けてゆるやかに傾斜する。遺物の出土はみられなかったが、覆土のあり方などから判断して近世の所産であった可能性が高い。

#### 6号溝

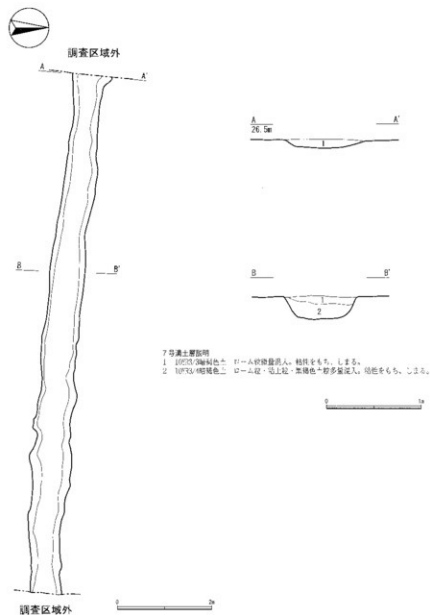
調査区の中央部を北東から南西へは直進する。南側を7号溝が並走する。各所を近・現代のイモ穴に切られる。確認部分の全長は11.5 m、上幅100～136 cm、底幅22～54 cm、深さ79 cmを測る。主軸方向はN-80°-Eである。断面は逆台形状を呈する。底面はやや起伏をもち、東から西に向けてゆるやかに傾斜する。遺物の出土はみられなかったが、覆土のあり方などから判断して近世の所産であった可能性が高い。

#### 7号溝

調査区の中央部を東西方向には直進する。中央部で6号土坑を切る。確認部分の全長は11.0 m、上幅52～90 cm、底幅26～60 cm、深さ27 cmを測る。主軸方向はN-85°-Wである。断面は緩やかなU字状を呈する。底面はやや起伏をもち、東から西に向けてゆるやかに傾斜する。遺物は流れ込みと思われる土師器片1片が出土し



第26図 6号溝 (平面図 = 1 : 80、断面図 = 1 : 40)



第27図 7号溝 (平面図=1:80、断面図=1:40)

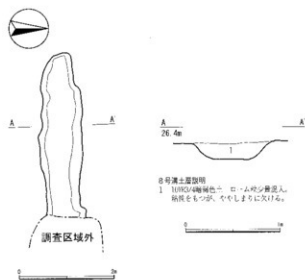
ただけである。覆土のあり方などから判断して近世の所産であった可能性が高い。

### 8号溝

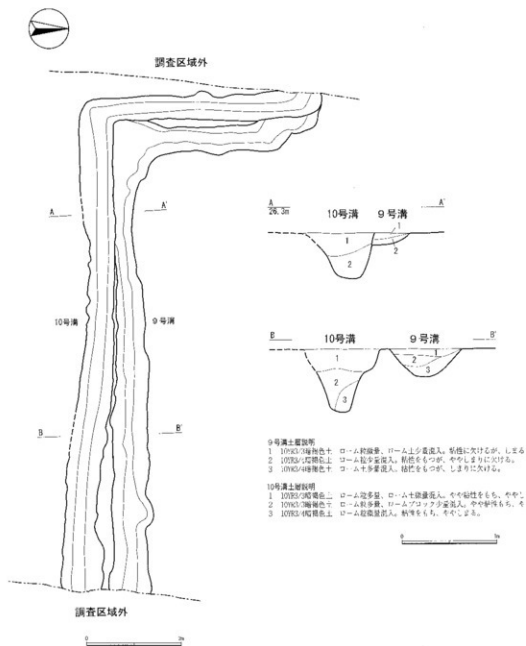
調査区の南側を東西方向にはほぼ直進する。1号掘立柱建物跡と重複分布する。一部分が検出されただけであり、確認部分の全長は3.5 m、上幅56～92 cm、底幅32～60 cm、深さ16 cmを測る。主軸方向はN-89°-Eである。断面は逆台形状を呈するものと思われる。底面はやや起伏をもち、東から西に向けてゆるやかに傾斜する。遺物の出土はみられなかったが、覆土のあり方などから判断して近世の所産であった可能性が高い。

### 9号溝

調査区の南側を東から西へ直進した後、西端近くではほぼ直角に曲がり、北側に5 mほど直進した後、さらに西側へ直角に曲がる。南側を10号溝が9号溝を切りながら並走する。確認部分の全長は16 m、上幅42



第28図 8号溝 (平面図 = 1 : 80、断面図 = 1 : 40)



第29図 9・10号溝 (平面図 = 1 : 80、断面図 = 1 : 40)

～120 cm、底幅18～30 cm、深さ30 cmを測る。主軸方向はN-89°-Eである。断面は緩やかなU字状を呈する。底面はやや起伏をもち、東から西に向けてゆるやかに傾斜する。遺物は瀬戸・美濃系陶器の碗1片が出土しただけである(第30図1、図版7)。出土遺物や覆土のあり方などから判断して近世の所産であった可能性が強い。切り合い関係をみると10号溝に後続する。

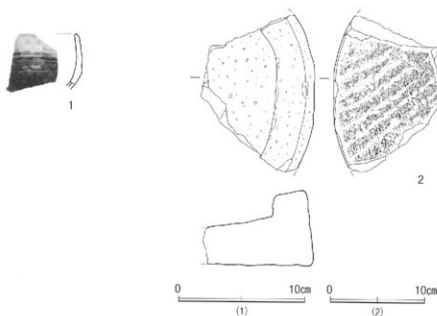
### 10号溝

調査区の南側を東から西へ直進した後、西端近くではほぼ直角に曲がり、北側に5 mほど直進した後、さらに西側へ直角に曲がる。北側を9号溝が並走する。確認部分の全長は16 m、上幅46～84 cm、底幅16～30 cm、深さ67 cmを測る。主軸方向はN-88°-Wである。断面は逆台形状を呈する。底面はやや起伏をもち、東から西に向けてゆるやかに傾斜する。遺物の出土はみられなかったが、覆土のあり方などから判断して近世の所産であった可能性が強い。切り合い関係をみると9号溝に先行する。

### 第2節 遺物

近世の遺物としては、9号溝より陶器1片、遺構外より石臼1点が出土しただけである。1は灰釉と鉄釉を掛け分けた瀬戸・美濃系掛分け碗である。胎土は密で灰色を呈し、微量の長石を含む。18世紀中頃以降のものである。2は安山岩製の石臼である。残存部で7本の条痕が見られることから、7本ないしは8本1単位の日であったものと思われる。

(林)



第30図 出土遺物 (1=1:3、2=1:4)

## 第7章 総括

今回の発掘調査はつくば明野北部工業団地進入路の建設に伴うものであり、調査範囲も長さ約90m、幅約10mときわめて限定されたものとどまった。しかし、今回の調査区の東側に隣接する地点（以下東側調査区）では山武考古学研究所による発掘調査が2006年に行われていることから、その成果をもふまえた上で、今回の調査結果のまとめを試みたい。

### 縄文時代

縄文時代に属する遺構としては1～5・10号の6基の土坑が検出された。南側の10号土坑を除いて調査区の北側に集中分布する。いずれも形状や覆土のあり方などから当該期の可能性が推測されたものであり、縄文土器を伴うものはみられない。断面などの形状から落し穴であった可能性が考えられる4号土坑以外は、性格も不明なもので占められる。当該期の遺物としては縄文土器2片が遺構外より出土しただけである。いずれも中期末葉・加曾利EIV式土器である。山武考古学研究所が調査した東側調査区では前期末葉・十三菩提式土器、後期前葉・堀之内式土器を用いた屋外埋竈などが確認されている。

### 平安時代

今回の調査で中心となった時代であり、堅穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟、土坑5基、および1号を中心とする住居内より土師器を主体とする遺物多数が出土している。調査区北側の1号住居は北西側の一部が調査区外にかかっているが、北側のカマドの右側より、壁面の先端に掘り込んだ平直面を壁外に張り出すように構築し、その周辺をカマドの構築材と同様の土で薄く覆った、一種の棚状施設と思われるものが発見されたことが注意される。茨城県内では、9世紀中頃から10世紀前半の住居内より、こうした棚状施設例の発見が相次いで報告されている。1号住居の時間的位置が9世紀中葉に比定されることも本文でのべた通りであり、1号住居から出土したきわめて多量の遺物の中に黒書をもつ土師器や紡錘車、砥石、鎌などが含まれていることとあわせて、本住居の性格がどのようなものであったのか、きわめて注目される場所であったといえるだろう。2号住居は東側調査区発見の14号住居の西側部分にあたるものであり、1号住居に比べると遺物の出土はごく限られていた。2号住居南側に位置する1号掘立柱建物跡は2間×2間の構成をとる。東側調査区では、平安時代に属する遺構として堅穴住居跡9軒、掘立柱建物跡6棟の分布が確認されている。今回検出された掘立柱建物跡を含めて、かなりの広がりを持つ建物群が堅穴住居群とともにこの地に営まれていた可能性は大きく、それらを擁する当該期の集落の全体的な構成や内容の分析は今後の重要な課題であると考えられる。なお、1号掘立柱建物跡の西側から検出された8・9・11号土坑などはいずれも長径100cmを超える所謂円形土坑であり、茨城県内の事例からみて墓塚であった可能性が強いことも、この問題との関連で注目されるものといえる。

### 中・近世

東側調査区では中世の井戸跡や溝などが検出されているが、本調査地点では当該期の遺構は未確認であり、遺構外より瀬戸・美濃系陶器（大鉢）が1片出土しただけに終わった。

一方、近世の遺構は比較的多く、調査区のほぼ全域から溝10条が検出されている。東西に走るものがほ

とんどであるが、調査区北側の3～5号溝は東側調査区の13・14号溝、中央部の6号溝は東側調査区の12号溝、同じく7号溝は東側調査区の11号溝、北側の9・10号溝は東側調査区の9号溝のそれぞれ西側部分にあたる。元禄15年(1702)の周辺13ヶ村の争論裁許篠々絵図や安永年間(1772～80)の「海老ヶ島城・松原村絵図」(ともに明野町1986)によると、今回の調査地点付近はほぼ畑地であったことがわかる。また、今から数十年前までは、本地点は水田として利用されていたことも知られている。今回、確認された溝は以上の畑や水田に伴う施設であったと考えられるが、時に重複しながら、並走する例の多いことが注意される。当該期の遺物はきわめて少なく、9号溝より瀬戸・美濃系の陶器碗1片、遺構外より石Fi1点が出土しただけである。

なお、調査区の中央部を中心に多数のイモ穴が検出されたが、近・現代に伴うものであり、本報告書ではその詳細に触れることはしなかった。

(林)

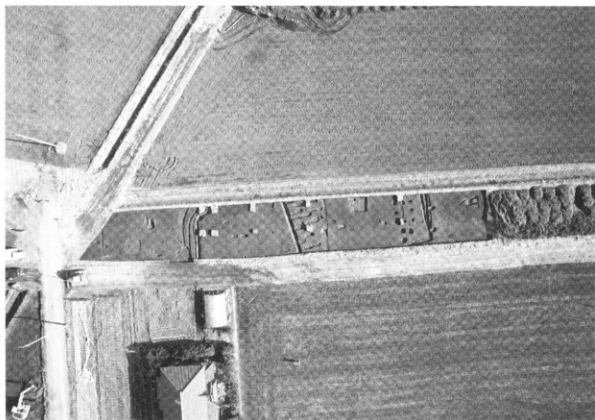
## 引用・参考文献

- 赤井博之 1998 『古代常陸国新治郡跡野の基礎的研究(Ⅰ)～奈良・平安時代の須恵器編年を中心に～』『奈良考古 第20号』奈良考古同人会
- 明野町史編さん委員会 1981 『明野町の小字名図』明野町史資料第一集 明野町長加倉井正利  
1983 『明野町の遺跡と遺物』明野町史資料七集  
1983 『明野町史』明野町
- 茨城県教育財団 2007 『筑北北道路・筑地河東遺跡』主要地方道筑北つくば線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査遺跡説明会資料  
(茨城県教育財団)
- 2007 『埋蔵文化財部ホームページ「発掘情報いばらき」筑西事務所 筑地河東遺跡』(http://www.ibaraki-maibun.org/)  
(茨城県教育財団)
- 茨城県教育庁文化課 1985 『重要遺跡調査報告書Ⅱ(城館跡)』茨城県教育委員会
- 茨城県研究会編 2006 『図説茨城の城郭』国書刊行会
- 折原洋一・松田政基 2006 『筑地河東遺跡 発掘地盤整備事業(経営体)松原地区関連遺跡発掘調査報告書1』筑西市埋蔵文化財調査報告書第2集 筑西市教育委員会・山武考古学研究所
- 郡村宣行 1992 『茨城県南部における鬼高式土器について』『研究ノート 第2号』財団法人 茨城県教育財団  
1998 『「常陸型」編年小考 - 茨城県南部を中心として -』『羽鳥の考古学 - 渡辺誠先生追悼記念論集 -』渡辺誠先生追悼記念論集刊行会
- 黒澤春彦他 1997 『南大橋遺跡 - 田村沖宿地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書。土浦市教育委員会 土浦市発掘調査会』
- 斉藤武士 2006 『海老ヶ島城跡 - 県営地盤整備事業(経営体)松原地区関連遺跡発掘調査報告書2 -』筑西市埋蔵文化財調査報告書第3集 筑西市教育委員会 株式会社地城文化財コンサルタント
- 斎藤弘 1996 『地下式障と葬送儀礼 - 栃木県下の事例を中心に -』『財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター研究紀要 第4号』財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 佐々木藤雄他 2007 『茨城県石岡市 片野城跡』石岡市教育委員会・株式会社東京城跡研究所
- 佐々木義則 2001 『茨城県における8・9世紀の須恵器運搬跡』『奈良考古 第23号』奈良考古同人会
- 黒山人作 2006 『茨城県教育財団文化財調査報告書第266集 新山(東)遺跡 つくば明野北部工業団地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団
- 中山晋名 1967 『新編宮内院誌』宮城報恩会復刊本
- 中村晋也 2003 『「常陸型」以前 - 松川流域における古墳時代遷移土器の部式的検討 -』『部城の研究 - 阿久津久先生追悼記念論集 -』阿久津久先生追悼記念事業実行委員会
- 明治大学木村橋研究室 1986 『明野町の村絵図』明野町史資料集第十二集 明野町長加倉井正利
- 茂木汎男 2002 『茨城県教育財団文化財調査報告書第189集 館野遺跡 主要地方道下館つくば線緊急地方道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団
- 福原裕一 2006 『地下式障の分類と編年試論 - 中馬場遺跡他の千葉県の事例をもとに -』『藤籠中近世考古 第2号』藤籠中近世考古学会





遺跡遠景 (北西より)



遺跡全景

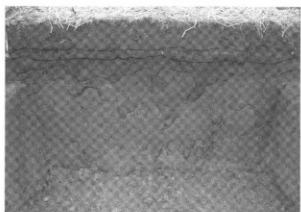
図版 2



遺跡全景 (北より)



遺跡全景 (南より)



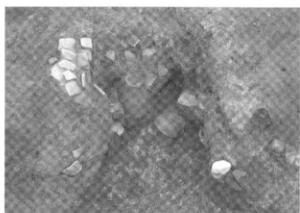
基本土層 (西より)



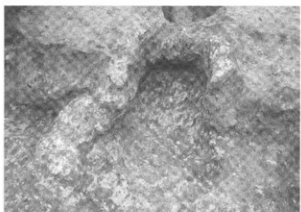
1号住居跡遺物出土状況 (南より)



1号住居跡発掘 (南より)



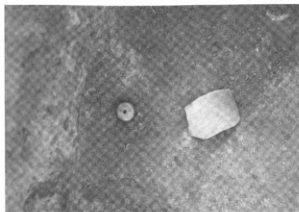
1号住居跡カマド出土状況 (南より)



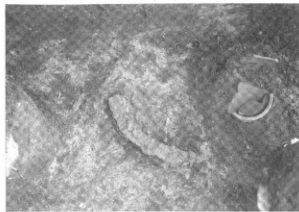
1号住居跡カマド完掘 (南より)



1号住居跡出土「平」黒書土器 (東より)



1号住居跡紡錘車出土状況 (東より)



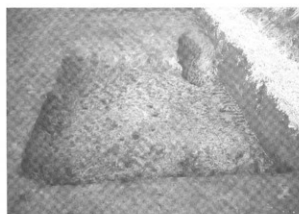
1号住居跡鉄製鏝出土状況 (東より)



1号住居跡坏出土状況 (北より)



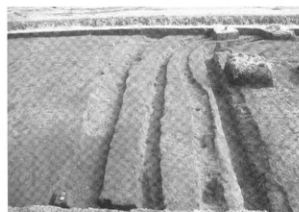
1号住居跡カマド支脚出土状況 (南より)



2号住居跡完掘 (南より)



1号掘立柱建物跡 (西より)



2・3・4・5号溝完掘 (西より)



5号溝 (南より)

図版 4



6号溝完掘 (東より)



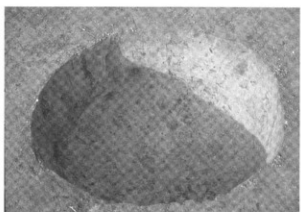
7号溝完掘 (西より)



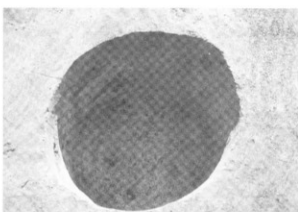
9・10号溝完掘 (南西より)



4号土坑完掘 (西より)



8号土坑完掘 (東より)



11号土坑完掘 (東より)



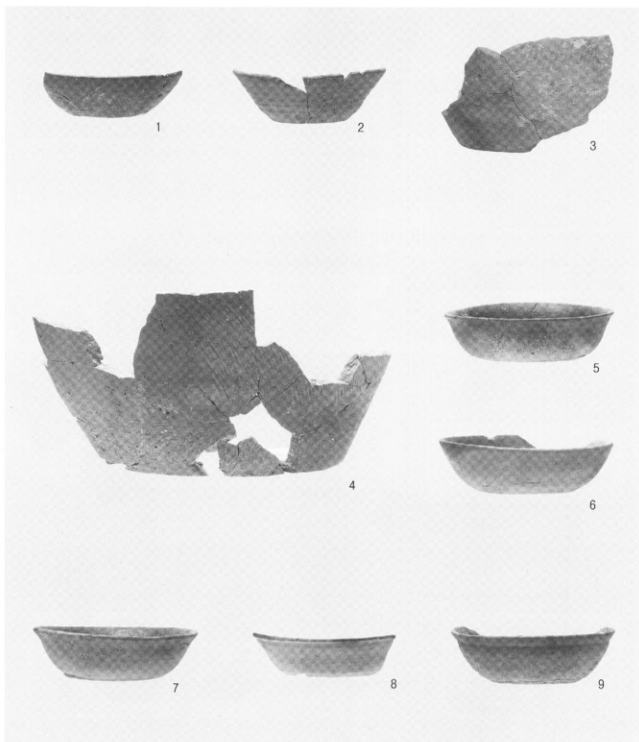
芋穴群 (西より)



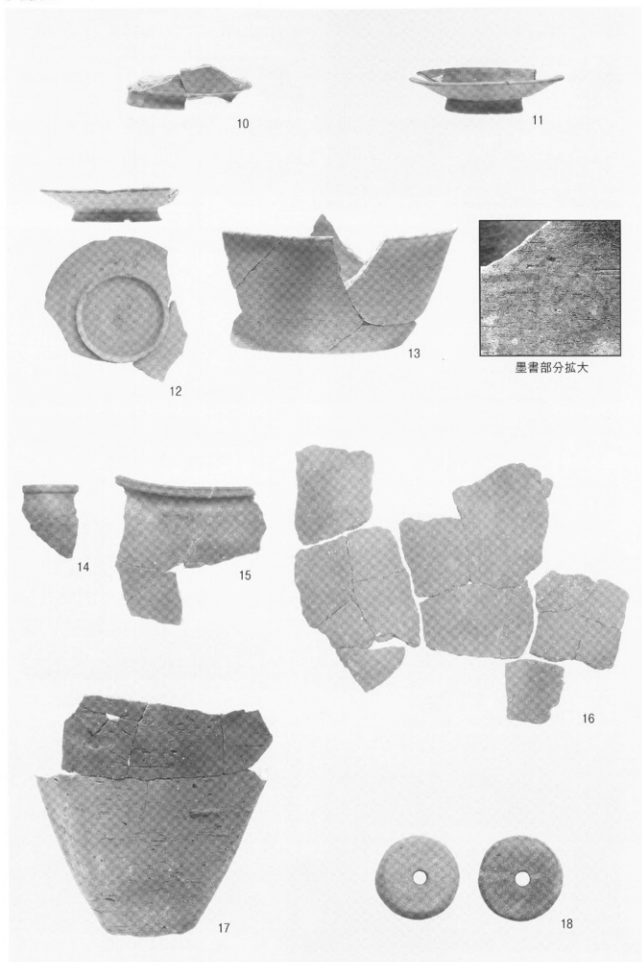
作業風景



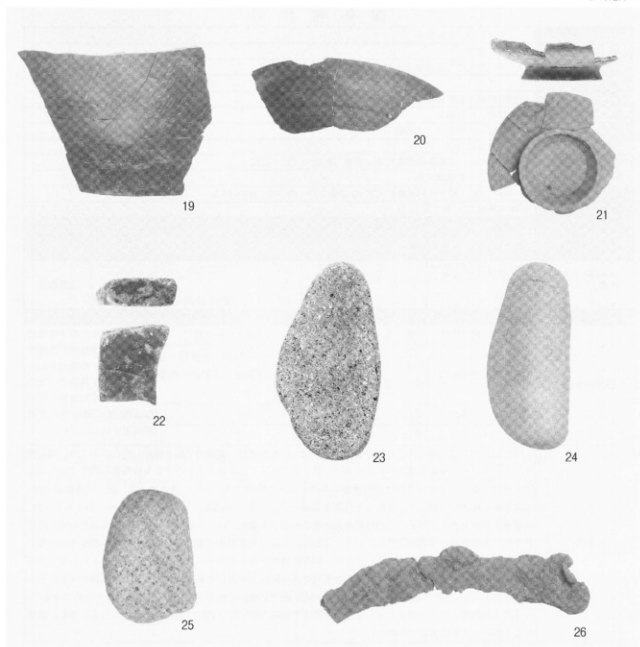
出土遺物 (1)



出土遺物 (2)



墨書部分拡大



出土遺物 (4)



出土遺物 (5)



出土遺物 (6)

# 報告書抄録

ふりがな	すみやきどひがしいせき							
書名	炭焼戸東遺跡							
副書名	つくば明野北部工業団地進入路埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	2							
シリーズ名	筑西市埋蔵文化財調査報告書第5集							
編集者名	林 邦雄・小野森人							
著者名	林 邦雄・小野森人・市瀬俊一							
	筑西市教育委員会							
編集・発行機関	〒308-0031 茨城県筑西市内360番地 ☎029-622-0183							
所在地	株式会社東京航業研究所 〒350-0855 埼玉県越市伊佐沼28番地1号 ☎049-229-5771							
発行年月日	2008(平成20)年3月14日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡 番号	北緯 °	東経 °	調査期間	調査面積	調査原因
すみやきどひがしいせき 炭焼戸東遺跡	らくせいし まつばらあひだのまが 筑西市松原字炭焼戸	502061	—	36° 15' 40"	140° 02' 09"	2007.12.3 ～ 2007.12.26	900㎡	道路敷設
所収遺跡名	種別	主な遺構			主な遺物		登記事項	
炭焼戸東遺跡	集落跡	縄文時代	土坑6基			縄文中期土器	竪穴住居跡と掘立柱建物跡、および墓塚の可能性もある土坑群から構成される	
		平安時代	竪穴住居跡2軒・掘立柱建物跡1棟・土坑5基			須恵器・土師器・土製品・石製品・鉄製品	平安時代の集落跡の一部を確認。同時期の集落の分布は2006年に調査された東側調査区にも広がる。	
		中世	なし			陶器		
		近世	溝10条			陶器・石臼		
要約	<p>今回の調査では、縄文時代から平安時代、中世、近世の遺構・遺物の分布を確認した。このうち、縄文時代については土坑6基が検出されているが、落し穴である1基を除くと、いずれも性格は不明で当該期の遺物も伴出しない。平安時代は今回の調査の中心となった時期であり、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡2棟、土坑5基を検出できた。なかでも1号住居からは「平」「新」の墨書土器が出土し、2号住居からも「内」の墨書土器が出土しており、その性格等は注目される。本遺跡では、これまでの調査で平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が多数確認されていることから、今回の調査結果は当該期の集落の規模や構成を考える上での格好の検討材料を提供するものであり、調査区南寄りの地点を中心に墓塚の可能性が考えられる土坑群が集中分布している事実も、この問題との関連で興味深いものといえる。中世については陶器が1片出土しただけであるが、近世では、調査区の広い範囲から溝10条が検出されている。当該期の遺物はきわめて少なく、9号溝より陶器1片のみであるが、その形状等より水田や畑に伴う施設であったと考えられる。また、遺構外より石臼1点が出土している。</p>							

茨城県筑西市  
筑西市埋蔵文化財調査報告書第5集  
**炭焼戸東遺跡**  
- つくば明野北部工業団地進入路埋蔵文化財発掘調査報告書 2 -

印刷 平成20年3月14日  
発行 平成20年3月14日

編集・発行 筑西市教育委員会  
株式会社東京航業研究所

印刷 株式会社ウエタケ  
〒101-0065 東京都千代田区西神田1丁目3番地6号  
TEL 03-3291-3917